The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	社会学的問題としての「ひきこもり」：「ひきこもり」の社会学定義と「ひきこもり」を社会学が取り扱う意義について
Author(s)	井出, 草平
Citation	年報人間科学. 2008, 29-2, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7138
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

社会学的問題としての「ひきこもり」

～「ひきこもり」の社会学定義と「ひきこもり」を社会学が取り扱う意義について～

井出　草平

〈要旨〉

本稿は日本において現象として確認されている「ひきこもり」についてその定義と社会学がこの現象を取り扱う意義を示すことを目的としている。

社会学にとって「ひきこもり」という現象が興味深いのは、社会学は人が存在すればそこには何らかの社会的行為があるだろうと考えてきたが、その常識的見解を裏切る現象が日本において数十万人規模で起こっていることである。しかも、その原因は社会的なものであり、制度的に現代日本で生きる者のライフコースの中に潜んでいる。

社会学が目的とすることは「ひきこもり」という現象の原因を特定することである。その作業を通じて二つの研究意義を達成することができる。

第一に「ひきこもり」を現代社会の代理表象として扱い、「ひきこもり」を通じて現代社会の検討を行うことである。

第二に原因特定の結果に従って「ひきこもり」という現象の収縮・予防のために処方箋を出すことである。社会学は研究の成果から積極的に社会政策の策定へコミットする必要性があると考えている。

社会学が「ひきこもり」を取り扱う意義を示すのが本稿の目的である。現在までの調査では「ひきこもり」は現代日本社会に数十万規模で存在するとみられている[1]。この現象の大きさから、その現象の原因を明らかにする意義はある。しかし、ただ現象を解明するのみならず、「ひきこもり」というものを通して現代日本社会を俯瞰できるという意義もあると考えられる。本稿では、この社会学的な二つの意義を示しつつ、その意義を反映した「ひきこもり」の社会学的定義を示す。

1. 「ひきこもり」と「引きこもり」の違い

本稿は「引きこもり」という表記ではなく、ひらがなで「ひきこもり」と表記する。この言葉を漢字ではなく、ひらがなで記述する理由は、本稿が問題にする「ひきこもり」とは「空間的に自室に留まる」という意味ではないからである。厚生労働省によって策定された『一〇代・二〇代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン――精神保健福祉センター・保健所・市町村でどのように対応するか・援助するか』（以下『ひきこもりガイドライン』と呼称）は以下のような表現をして「ひきこもり」を素描している。

ひきこもるようになったとしても、「三日ひきこもったのでストレスから回復して元気になった」ということと、「三年間ひきこもっても楽になるめどがたたない」ということでは、生じている現象が異なっていると考えられます。（国立精神・神経センター二〇〇三：二）

『ひきこもりガイドライン』によれば「三日ひきこもる」のと「三年ひきこもる」のでは生じている現象は異なるという。「体力回復するために三日ほど自宅にひきこもる」というようなことはほとんどの人が経験しているだろう。風邪を引いて寝込んだり、旅行の疲れを癒したり、テスト前に家に籠もって勉強するなどして三日ほど外出しないというのは、誰でも経験したことがあるのではないかと思う。しかし、これは本稿の扱う「ひきこもり」とは異なる。なぜならば、風邪や旅行疲れで自宅から出ないというのは、空間的に「引き籠もる」状態であるからだ。本稿が扱うのは、空間的に「引き籠もる」ことではなく、社会との接点が切れて所属やコミュニケーションを喪失することである。従って、本書は空間的に「引き籠もること」を連想させる漢字表記ではなく、ひらがなの「ひきこもり」という表記を採用している。

2. 精神医学の定義検討

「ひきこもり」は精神医学を中心に取り扱われてきた。現在までに書かれたほとんどの論文が精神医学によるものである。そして「ひきこもり」の定義で最も参照されているものも精神科医の斎藤

環の行ったものである。斎藤の言う「ひきこもり」とは以下のようなものである。

二十代後半までに問題化し、六ヶ月以上、自宅にひきこもって社会参加をしない状態が持続しており、ほかの精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの（斎藤環　一九九八：二二五）

まずは、この斎藤定義の検討から行う。この斎藤定義は「診断基準」と表現するとその性質がより明確に了解できるものである。「ひきこもり」という問題を社会問題として位置づけたのは斎藤の著書『社会的ひきこもり』である。斎藤はこの本では、「ひきこもり」を「社会的ひきこもり」として呼称している。そして、「社会的ひきこもり」という用語は英語の "Social withdrawal" の翻訳語であるという説明をしている。しかし、この2つの言葉を同じものだと考えるべきではない。なぜなら、この二つの言葉に含まれる意味内容は相当異なるものだからである。斎藤は以下のように述べている。

「社会的ひきこもり」という言葉をご存じでしょうか。Social withdrawal という、本来はさまざまな精神障害にみられる、一つの症状を意味する精神医学の言葉です。（斎藤　一九九八：四）

ここでは、（1）Social withdrawal と言う言葉は斎藤が作った言葉ではないこと、（2）精神医学で「症状」（障害名にあらず）を表す言葉として使われていることが述べられている。斎藤は自身の所属する爽風会佐々木病院のウェブページでは以下のような説明もしている。

私は一昨年上梓した著書中で「社会的ひきこもり」という言葉を用いたが、これはアメリカ精神医学会の編纂した診断と統計のためのマニュアル「DSM-IV」の中で、"social withdrawal" と呼ばれる症状名の直訳である。DSM-IV の普及率や、比較的ニュートラルな名称なので受容されやすいと考えて採用した（2）。

ここから、斎藤環は「社会的ひきこもり」という言葉をもっとも一般的に使われている精神医学の診断マニュアルから採用したということがわかる。では、DSM では Social withdrawal という言葉はどのように使われているのだろうか？

精神障害の判断マニュアルである DSM には Social withdrawal という項目（診断名）はない。その理由は、斎藤環が引用した Social withdrawal というものは「症状名」であるからである。例えば、309.81「外傷後ストレス障害」(Posttraumatic Stress Disorder) の項目には以下のような記述がある。

その症状には、感情調整の障害；自己破壊的および衝動的行動；

解離症状；身体愁訴；無力感、恥、絶望、または希望のなさ；永久に傷を受けたという感じ；これまで持ち続けていた信念の喪失；敵意；社会的引きこもり；常に脅迫され続けているという感じ；他者との関係の障害；その人の以前の人格特徴からの変化などがある。

もともとの原書の DSM の記述は以下のようになっている。

The following associated constellation of symptoms may occur and are more commonly seen in association with an interpersonal stressor (e.g., childhood sexual or physical abuse, domestic battering, being taken hostage, incarceration as a prisoner of war or in a concentration camp, torture): impaired complaints; feelings of ineffectiveness, shame, despair, or hopelessness; feeling permanently damaged; a loss of previously sustained beliefs, hostility; social withdrawal; feeling constantly threatened; impaired relationships with others; or a change from the individual's previous personality characteristics.

確かに DSM には "social withdrawal" が登場する。しかし、それは、「障害」(疾患)の診断名ではない。

「障害」(疾患)の診断名というのは、ここでは「外傷後ストレス障害」というものである。病気で言うと病名にあたるものである。"social withdrawal" という言葉は、「診断名」ではなく、「症状」として DSM には記述されている。例えば、「風邪」という病気には「急性上気道炎」という「病名」があり、これが障害名に相当する。そして、その症状としての「頭痛」「発熱」などの症状が "social withdrawal"に相当する。

"social withdrawal" は「外傷後ストレス障害」にのみ記述されている「症状」ではない。摂食障害の項目にも症状として記述されているし、統合失調症の項目にも症状として記述されている。

さまざまな精神障害の「症状名」として使われている "social withdrawal"の翻訳語として「社会的ひきこもり」という言葉を斎藤環が採用したわけだが、その意味するところは両者でまったく違っている。斎藤は爽風会佐々木病院のウェブページで以下のように述べている。

「社会的ひきこもり」は診断名ではない。これを臨床単位とみなすことは出来ない。それは「不登校」が臨床単位ではないのとほぼ同じ理由からである。それは一つの状態像であり、問題群である。精神医学の中で類似の概念を見つけるなら、「アルコール関連性障害」がもっともこれに近い。これは「アルコール」をめぐって生ずる依存症、臓器障害、暴力、交通事故などといった、精神・身体・社会など複数の領域にまたがる諸問題の総称である。私の考える「社会的ひきこもり」の問題は、「ひきこもり関連性障害」として理解することが、さしあたり最も

正確であるように思われる[3]。

斎藤は「ひきこもり」というものを臨床単位とは考えずに、「ひきこもり関連性障害」として理解することが最も正確だと述べている。DSMの"social withdrawal"は単に特定の症状を名指している。しかし、斎藤環の言う「社会的ひきこもり」は単に症状を指しているわけではない。両者の違いを因果関係に置き換えてみる。

DSMにおける"social withdrawal"は、「外傷後ストレス障害」や「摂食障害」という「障害」（疾患）が原因となって、結果として"social withdrawal"という「症状」が出るという因果関係の把握が行われている。しかし、斎藤環は何かの「障害」（疾患）の結果として「ひきこもり」が起こるとは考えていない。上記の爽風会佐々木病院のウェブページの文章では、ひきこもり状態と関連する問題群として「社会的ひきこもり」を捉えている。そして、斎藤は次のように述べている。

社会的ひきこもりに伴うさまざまな症状は、しばしば二次的なものです。つまり、まず「ひきこもり状態」があって、この状態に続発する形で、さまざまな症状が起こってくるということです。やはりもっとも重要で、一次的な症状としては、「ひきこもり状態」を考えるべきではないでしょうか。

（中略）

少なくとも、ひきこもった状態について本人がいだいている劣等感、それに対する配慮を抜きにして、治療をすすめることは難しいでしょう。臨床的な実用性から考えるなら、やはり「社会的ひきこもり」の状態を第一に考えて、診断・治療に取り組む必要があると私は考えています。（斎藤 一九九八：二八―九）

このように斎藤は、「社会的ひきこもり」の「結果」もしくは「関連」したものとして、諸症状が起きており、「社会的ひきこもり」という把握をした上で治療を行うのが有益だと判断している。鬱病・摂食障害・統合失調症などの精神障害を原因としたひきこもり状態（social withdrawal）と斎藤の言う「社会的ひきこもり」を区別する基準を明確に示しているのは精神科医の衣笠隆幸である。衣笠は「一次的ひきこもり」（＝「社会的ひきこもり」）と「二次的ひきこもり」（精神障害を原因とするひきこもり＝social withdrawal）を区別する。

「一次的ひきこもり」は、固有のひきこもり群であり。他の神経症的症状は顕著ではなく、「ひきこもり」そのものが主な症状で、その背景に無気力、空虚感などをもっている。「二次的ひきこもり」は、他の神経症的な症状のために「ひきこもり」の状態にあるものを呼んでいる。（衣笠 二〇〇一）

「ひきこもり」には一次的なものと二次的なものがあり、衣笠の

言葉で言うならば、精神医学で診断に使われるＤＳＭに記載されている "social withdrawal" は「二次的ひきこもり」であり、斎藤の言う「社会的ひきこもり」は「一次的ひきこもり」に相当する。

また、この "social withdrawal" と「社会的ひきこもり」の概念の相違に着目して、精神科医の井上洋一は次のように述べている。

「ひきこもり」状態を示す若者で、一次的な原因として明らかに精神疾患があり、二次的に「ひきこもり」が生じている症例は、「ひきこもり」から除外されている。「ひきこもり」が社会的「ひきこもり」(social withdrawal) と敢えて呼ばれるのは、その原因が精神疾患による「ひきこもり」とは異なることを示すためである。すなわち精神疾患に起因する「ひきこもり」は従来から知られており、「ひきこもり」は疾患から生じる症状の一つとして教科書にも記載されている。それらの疾患によって生じた「ひきこもり」は改めて「ひきこもり」として取り上げる必然性はない。一義的には医学にかかわる問題であると考えられるからである。（井上 二〇〇六）

井上は「疾患によって生じた「ひきこもり」は改めて「ひきこもり」として取り上げる必然性はない。」と述べる。この種のひきこもりはここで "social withdrawal" と呼んでいる DSM などで記述される精神障害に起因する「症状」としてのひきこもり状態である。

井上は、この種のひきこもり状態はもともとの精神障害への治療によって、改善されるべきものであるという考え方を持っている。

また、精神医療の清水将之は次のように「ひきこもり」を捉えることを述べている

さしあたり、①自宅へひきこもって（少なくとも）家族以外の一般対人関係を遮断していること、②統合失調症など特別の精神障害に由来する退却ではないこと、③ひきこもりを始めて六か月以上が経過していること、といった程度の基準でよろしいのではないか。当面は、治療の手段を求めるためではなくて、社会問題として輪郭を浮き上がらせ、世間がどう対処する必要があるのかという方法論を組み立て、困っている親に援助の手立てを提供する、そのための定義を立てればよいのであろう。自己愛人格傾向があるかなしかで区分しようとする試みもある。それもよろしかろう。それによって、事例への接近法に工夫ができるかもしれない。いじめの PTSD に由来する事例は、治療的に区別する必要があるという指摘もある」（清水 二〇〇三：二三一）

斎藤、衣笠、井上、清水に共通する問題意識は「治療」を一定の目安としており、そのために「社会的ひきこもり」か "social withdrawal" ということを区別し、「社会的ひきこもり」へ専用の対応をすることが治療的であるという認識である。

このようなことから、斎藤に代表される精神医学の「ひきこもり」定義というものは「診断基準」と表現した方がより明確に了解できると考え得られるのである。「診断基準」としての「ひきこもり」の定義を使用することによって、患者をよりよく治療できるようになるのが精神医学による「ひきこもり」の定義の意義なのである。

3．社会学による「ひきこもり」の定義

社会学において「診断基準」である精神医学の定義をそのままの形で使うのは、二つの理由から妥当ではない。第一に、学問の問題関心が異なるという点である。社会学も精神医学と同じように診察室で患者を診断して治療を行うというものであれば、精神医学の定義の採用をすることは問題がない。しかし、社会学という学問はそのようなものではない。診断・治療を目的としない社会学が、「診断基準」を「ひきこもり」の定義として採用し続けるのは問題がある。加えて、社会学としての定義を行わないということは、社会学として「ひきこもり」の何が問題なのか？という位置づけをしないということを意味している。第二に定義を与える単位が精神医学と社会学では異なっていることが点が考えられる。精神医学では定義は各個人（患者）単位で行われるが、社会学は「現象」を扱う学問であるので、定義も個人ではなく現象単位で行われる。つまり、精神医学の定義は「ひきこもりとはどんな人か？」という形でなされるのに比べて、社会学の定義は「ひきこもり現象とはどんなものか？」という形の定義をとるのである。このような二つの理由から社会学的な定義が必要とされるのである。

本稿でいう社会学とは「社会」的な説明変数を用いて現象を説明する学問と定義される。社会学は「社会」や「社会現象」を分析することから社会学だと言われることがあるが、社会現象を分析するのは社会学だけの特権ではない。例えば「自殺」という社会現象であれば、経済学的に分析すること（不景気なので自殺が増えた）も可能であるし、心理学的に分析すること（自殺者のパーソナリティや社会不安から説明をする）ことも可能である。従って、本稿でいう社会学とは社会現象を分析するものではなく、経済や心理とは違う独自の社会的変数を用いて、特定の現象に対しての説明を行うものを社会学として捉えている。これは言うまでもなくエミール・デュルケームの「社会学主義」(sociologisme)[4] の考え方に従った社会学のとらえ方である。

定義を行うためには、「ひきこもり」という現象はどのようなものであるかということを示す必要がある。「ひきこもり」には以下の三つの性質があることがわかっている。（1）七〇年代から大規模に発生し（2）日本にのみ数十万単位で存在し（3）男性が八割、という性質である。

第一の性質は「ひきこもり」は七〇年代から大規模に現れてきたというものである[5]。「ひきこもり」は七〇年代から不登校状態の長期化として生まれてきた現象である（後掲図1参照）

第二の性質は「ひきこもり」は日本に特に多いと言うものである。「ひきこもり」という現象は世界中どこでもみられる現象ではない[6]。「ひきこもり」は日本や韓国イギリスといった限られた地域に見られるもので、なかでもとりわけ数十万単位で存在しているのは日本だけである。

第三の性質は「ひきこもり」は八割が男性というものである。各調査の比率を並べると、斎藤環による調査が男性八六％（斎藤 一九九八）、厚生労働省による『ひきこもりガイドライン』では七六・四％（国立精神・神経センター精神保健研究所社会復帰部、二〇〇三）、埼玉県健康福祉部によると調査では七九・五％（高畑 二〇〇三）、全国に支部を持つ「全国引きこもりＫＨＪ親の会」の調査では八三・七％（KHJ 親の会 二〇〇五）となっており、男性が八割前後という数字は信頼がおける。

「現象」という単位で考える[7]場合、（1）七〇年代以降に現象化した（2）日本での現象である（3）男性が八割、というこの三つ性質が現象を限定し、特定するためのものになる。従って、本稿が「ひきこもり」として定義する現象には、この三つの性質を持ったものになるため、一九七〇年代以前のひきこもり（以前は少数、個別的に起こっていた可能性がある）、日本以外でのひきこもり、女性のひきこもりは含まれない。

この三つの条件の次に必要なのは「ひきこもり」という現象の状態記述を行うことである。その状態を記述する場合にキーワードとなるのは「社会的行為」という用語である。以下で「社会的行為」についての概念的整理を簡単に行う。

「社会的行為」とは「他者へ何らかの意図を持って行われる行為」のことである。代表的な定義としては、マックス・ヴェーバーのものがあげられる。ヴェーバーは社会的行為を「他の人々の過去や現在の行動、或いは、未来に予想される行動へ向けられるもの」（Weber 一九二二＝一九七二：三五）と定義している。しかし、この定義では人間が行う行為のほとんどが社会的行為と捉えることが出来きると見なされてきたが、どのような行為が社会的行為で、どのような行為が社会的行為ではないかという弁別はヴェーバー社会学の根幹には全く関連性がないため、社会的行為の線引きを行うことはヴェーバー社会学の理解においては重要ではないと思われる。ただ、後年の研究者が考えたほど、ヴェーバーの社会的行為の定義は広範囲に及ぶものであったかは検討の余地がある。ヴェーバーは「内的行動でも、他の人々の行動に向けられて初めて社会的行為になる。従って、例えば、黙想や孤独の祈りのような宗教的行動は社会的行為ではない」（Weber 一九九二＝一九七二：三六）とも述べている。孤独の祈りは神との会話があるが、会話の相手は神である。社会でもなければ人間でもない。従って他者への働きかけが意図されていない行為である。要するに黙想や孤独の祈りは社会的行為ではないとされるのだ。しかし、一方で、敬虔な生活の一つ一つの行為がその人の評価になることを思えば、「祈り」は他者にとって意味を持った行為とも考えられる。おそらくは、行為者が他者に向けて〇〇というつもりで行った行為以上の意味を持っていない。従っ

て、ヴェーバー定義においても、意図せざる結果を生み出した結果は、他者に向けられていようとも社会的行為とは言えないと考えられる。

また、「社会的行為」をジョージ・ホマンズは「人びとが接触している他者に向けた行為」（Homans 一九七四＝一九七八：一）と捉えている。つまり、ヴェーバー定義に「直接接する他者」という限定をかける形での再定義をしているのである(8)。

では、この「社会的行為」という概念を用いて「ひきこもり」を捉えるとどうなるだろうか。この作業をする前に「ひきこもり」に対しての一般的な誤解を指摘しておく必要がある。「ひきこもり」は創作的と言われることについてである。井出（二〇〇七）では吉本隆明の『ひきこもれ』を素材としたが、本稿では作家の森博嗣の記述を扱う。

「引き籠もり」という言葉が、マスコミの過剰な報道によってマイナスのイメージになった。これは明らかな間違いである。多くの才能は、引き籠もりによって仕事を成す。引き籠もらない才能の方が少ない。社会を引っ張っていくのも、また、社会を豊かにする発想も、すべて引き籠もって生まれたものだ。この場合、引き籠もり、というのは、他人に邪魔をされない自の時間に集中することである。それができない人間は、多くの場合、仕事ができない人間だと思ってまずまちがいない。

外見上、人間が引き籠もっている部分は、見えない。つまり、外側からは観察できない。観察できるのは、出てきたときの様子だけである。だから、仕事をなした人間、あるいは才能に触れるとき、どうしても、外に向かってアピールしている場面ばかりを目にすることになる。その印象で、ついその人物の仕事を評価してしまう傾向があるだけだ。たとえるならば、論文を学会で発表している研究者、新刊を上梓しファンにサインをする作家、テレビのインタビューに登場する有名人、などなど、そんな場面だけが目に見える。けれども、その人物をその立場に立たせたのは、見えないところに籠もって彼らが励んでいた行為によるものだ。発表だけする才能というのはありえない。これは企業や国家にもいえる。日本の企業は、昔のようにもっと引き籠もって研究開発に力を注ぐべきではないか、と最近感じる。また、そういった努力の集合として、国家の力が現れるだろう(8)。

この森の記述自体はまったく問題がない。しかし、森の記述を本稿で扱っているような「ひきこもり」と混同する誤読が出てきた場合に問題が起こるのである。井出（二〇〇七）でも同じような指摘を行ったが、森の記述で書かれていることは、世に小説を発表するために一人で籠もって作業するという類であり、本稿で扱う「ひきこもり」とは異なったものである。「ひきこもり」とは創造のために（創造を意図として）行われているわけではない。井出（二〇〇七）での当事者の言葉であると、「自分はひきこもりたくないのに

ひきこもってる」という表現になる。本人は学校に行くことや、働くことなど社会参加を望むがそれができずに仕方なくひきこもる状態である。森の記述にある「一人になること」と本稿が問題とする「ひきこもり」は別のものである。

この点を押さえた上で、ひきこもり状態における「行為」に着目してみると、当事者に共通してみられる行為は「食べる」「寝る」「テレビを見る」といったものが上げられる。これは創造を目的とした行為ではないし、そもそも、他者に向かって何かの意図をもって行う行為ではない。従って「社会的行為」とは言いづらい。「ひきこもり」というものは理念的には、家族以外の他者とコミュニケーションを取らず社会参加をしない。外出していたとしても、社会参加は皆無である。「ひきこもり」は社会から引いてしまっているために、彼らの行為は「社会的行為」とはなり得ることが難しい。例えば、泥棒が警察に捕まることを恐れて山にとじ籠もったり、一人の時間を持って小説なり評論を書いたり、というのは社会的行為になり得る。なぜなら、泥棒は警察に捕まりたくないという「意図」を持って行為を行っているし、小説なり評論を書くというのはそれを世間に発表するためになされている行為だからだ。しかし、「ひきこもり」は一人の空間に籠もるだけではなく、さらに社会からも退却してしまう。社会から退却すると他者との交わりが無くなるため社会的行為は皆無に等しくなる。ひきこもり状態とは、他者との相互行為が消失し、社会的行為が縮減された地点として捉えることができるのである。

よって、**理念的**[19]**な「ひきこもり」は「社会的行為の喪失点」であると捉えることができる**[11]。実態はこの理念的な「ひきこもり」からの偏差で捉えることになる[12]。

4．「ひきこもること」と「ひきこもりつづけること」の弁別

定義に拘泥することはしばしばディレッタンティズムを引き起こすが、もう一点留保が必要である。それは「ひきこもること」[13]と「ひきこもりつづけること」の弁別である。

例えば、不登校症状を示して「学校に行けない」と言ったとき、それは「学校」に行った時のことを仮定してその状況が「不快」であったり「耐え難いもの」であったりするために「学校に行かない」という行為が選択される。このような登校拒否行動が、「ひきこもり」の初段階だとすると、その「ひきこもる」という行動は「社会的行為」と言えよう。しかし、その「ひきこもる」という初段階の行為と、「ひきこもり続ける」＝「ひきこもり」という行動は違ったものである。当初、意図したとおり行為の最後まで意図が続くとは限らない。加えて塩倉裕が指摘するように「ひきこもり」とは「本人の意図を超えて」（塩倉 二〇〇三：二一五）続くものでもある。最初はひきこもることが最善の策であったとしても、いつしか抜け出せない泥沼のようなものになっていることがしばしばある。ひきこもり続ける段階での意図は、もはや当初の意図（例えば耐え

難い登校を拒否する）というものではないのである。

精神科医の倉本英彦は「臨床的介入が必要とされるひきこもりを「執拗な社会的ひきこもり」（PSW=Persistent Social Withdrawal・仏語ではRSP=Retrant Social Persistant）」（倉本 二〇〇三：二四二）と呼んでいる[14]。当事者が「ひきこもりたくないのにひきこもってる」（井出 二〇〇七：七〇）という表現を見る限りは、ひきこもり当事者にとってひきこもり状態は「意図」をしてひきこもっていないのである。本人は「ひきこもり状態から離脱したい」「社会参加したい」「就労したい」と望んでいたとしても、それがままならないのが「ひきこもり」なのである。斎藤環は次のように述べている

> 彼らはしばしば「無気力」あるいは「自閉的」と形容されますが、いずれも私は正確な表現ではないと考えています。見掛けとはうらはらに、彼らほど社会参加と対人関係を切望しているものもいないからです。むしろそうした気持ちが強すぎるあまり、葛藤のなかに釘付けになっているとみるべきでしょう
> （斎藤二〇〇〇：一五〇）

社会参加が意図されていたとしても、「ひきこもり」は執拗に続く。つまり、「ひきこもり」という行為がなされていたとしても、それは本人の「意図」を超えた行為なのである。したがって、「ひきこもり」が始まる段階では「意図」があったとしても、ひきこもり続けるうちに「ひきこもり」とは本人が意図しないにもかかわらず終わらないものであると捉えた方が正確である。この場合は、「ひきこもり」という行為は「社会的行為」ではないといえる。

したがって、「ひきこもること」（ひきこもりはじめること）は「社会的行為」である可能性はあるが、「ひきこもり」という行為自体は「社会的行為」とは呼称できない。とはいえ、「ひきこもり」という行為自体が社会的行為か否かという問題ではそれほど重要な点ではない。「社会的行為」という概念をひきこもり現象に持ち込む意義は、ひきこもり状態では種々の社会的行為が激減することを表すためである。つまり、「ひきこもり」と呼ばれる期間に種々の社会的行為が激減することが問題であって、「ひきこもり」というものそのものが社会的行為であるか否かは特に問題ではないからである[15]。

本節までにおいて「ひきこもり」の定義を行ったが、この定義から社会学において「ひきこもり」を扱う意義を以下で示す。

5．学問的意義

「ひきこもり」という現象を社会学が扱う理由は二つ存在する。一つは社会学にとって「ひきこもり」という現象は現代日本社会を見通すためには最適なものであるということである。

このことを示すには、エミール・デュルケームの『自殺論』に沿っ

て述べるのが最も適当だと思われる。デュルケームは「自殺」は「不幸の指標」であると述べている。これは『自殺論』という論文が「自殺」という現象の理解を目的としているだけではなく、「社会」全体の分析であることを示唆している。つまり、デュルケームは社会の「不幸」な部分を代理的に表現するものが「自殺」であるという仮定に基づき、「自殺」を通して社会の不幸な部分をのぞき込もうとしていたのである。この意味において、本書での「ひきこもり」は『自殺論』における「自殺」と似たポジションにある。つまり、「ひきこもり」について考察を行うということは、「ひきこもり」という集合に対しての考察としてはもちろん、社会全体の考察にもなり得るのである。社会の中に「不幸」が存在し、その「不幸」を一部の人間たちが引き受けること。これがデュルケームにとっての「自殺」であり、本稿にとっての「ひきこもり」である。

デュルケームと『自殺論』というと、一般的には「アノミー」という概念に焦点が当たる傾向がある。しかし、デュルケームが上げた四つの自殺類型のなかでアノミー的自殺に充てられた記述の分量は決して多いとは言えない。フィリップ・ベナールがいうように「最も多くのデータが与えられ、完全な理論が組み立てられているのは自己本位的自殺について」(Besnard 一九八二＝一九八八：六〇－一)なのである。デュルケーム自身一九〇二年以降に「アノミー」という言葉を使うことはなくなり、社会学で最も有名な概念はデュルケーム自身によって破棄されているのである(Besnard 一九八二＝一九八八：五六)。このことからもデュルケームが自己本位的自殺に本来の関心があったということが見て取れよう。マッキーヴァやマートンなどのアメリカ社会学がアノミーという言葉を復活させ、広めたことによって、デュルケームとアノミーという概念はセットとして認識されるようになったが、デュルケームの研究では、アノミーという概念が占める位置はそれほど大きくない。彼の興味は自己本位的自殺とエゴイズム論にあったと考えられる。この理由は、研究上の関心としては、自己本位的な状態＝「集団から個人が孤立していくこと」に彼が関心を持っていたからであろうと考えられている(16)。

この観点から言って、本稿が取り上げる現代日本社会における「ひきこもり」は、デュルケームにとっての「自殺」と似たような位置にある。方法論上の位置づけにはとどまらない。「ひきこもり」という現象は社会的に「ひきこもる」ことであって、単に空間的に孤立するのではなく、社会的に孤立をするという現象である。デュルケームが自殺を通してみようと考えた、個の孤立という現象を現代日本において最も端的に表現しているのが「ひきこもり」だと考えられるのである。この文脈において、**「ひきこもり」という現象を研究することは、現代日本のエゴイズム論を行うのに最も適した現象であると考えられる。**

また、デュルケームが「自殺」を「社会」の代理表象として捉えていたことに関連させると、「ひきこもり」は現代日本社会を表象していると捉えられる。このことは「ひきこもり」が一九七〇年代から増加した現象であるという性質から判明している。「ひきこも

り」の実数推定調査は二〇〇二年二〇〇三年の二度しか行われていないため、「ひきこもり」そのものの経年変化は見ることは出来ないが、「ひきこもり」の大半を生み出している「不登校」の推移からおおよその「ひきこもり」の経年変化は推測出来る。

図1は長期欠席者のグラフである。戦後しばらくは経済的困難で長期欠席する生徒、栄養失調・医学の未発達などで病気になり長期欠席をする生徒がいたため、長期欠席者は非常に多い。グラフは一九七〇年代半ばに底を示すが、これは、経済成長や、栄養状態の改善、医療の整備がなされたことによるものだと考えられる。そして、なにより、子どもが働かなくても生きていける時代になったことが大きいと考えられる。一九七〇年代というのは、ほとんどの子どもが学校に行けるようになった時代である。経済的理由でもなく、病気でもなく、学校に行けない子どもの登場が、一九七〇年から起こり、一九八〇年に本格的な増加が起こるのである。これが、図1の右側の増加である。

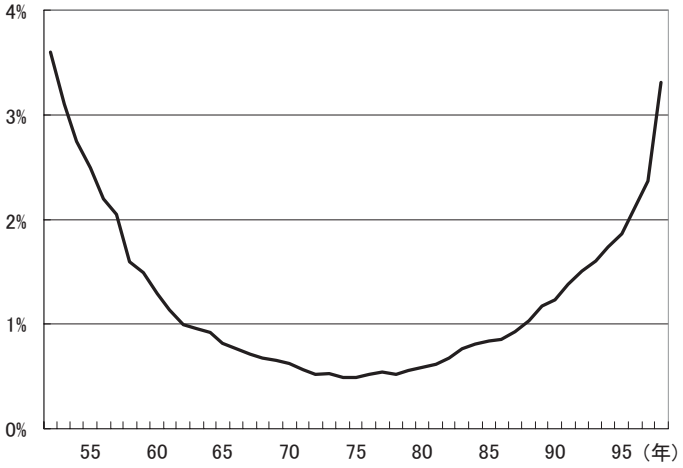

図1　中学校における年間50日以上の長期欠席者率
文部科学省『学校基本調査』(1953-1999)・保坂(2000)から作成

従って「ひきこもり」という現象は一九七〇年代半ばに学齢期を迎えた一九六〇年代初等生まれ以降に特有の現象である。現在で言えば、四〇歳半ば以下の世代に現れているものである。このことは「ひきこもり」を社会全体の代理表象物として取り扱うのは妥当ではないということを示しているが、逆に現代的現象として「ひきこもり」を捉え、現代日本社会の代理表象として扱うことの妥当性をしめしている。

「ひきこもり」という現象は、デュルケームが『自殺論』で最も分析をした自己本位自殺と機能的には同じ役割を持っている。つまり、**「ひきこもり」とは「社会的行為の喪失点」として捉えられ、そのような状態は集団から個人が切り離されることによって生み出される。「自殺」か「ひきこもり」という結果の違いはあれど、両者は同じくエゴイズム論なのである。**デュルケームが「自殺」を通してみようとしたものと同じようなものを現代日本で探すならば、「ひきこもり」という現象が最も適切なものの一つだと考えられる。

「ひきこもり」という現象を社会学が扱う意義の一つ目は、「ひきこもり」を通して「社会から孤立する個人」という社会状況が社会的にどのように生み出されているかということを明らかにできるという点である。

6．政策的意義

「ひきこもり」というものを社会学が扱う二つ目の意義は社会政策的な意義である。一言で言うならば、「ひきこもり」という現象の原因を特定することによって、予防を目的とした政策を行い、現象の規模を縮小することである。本稿では政策的意義をヴェーバーの立場を範型に記述する。

ヴェーバーの立場としてまず確かめなければならないのは各専門家による役割分業を彼が主張していたわけではないということである。科学者の仕事を現象の因果を求めることとし、実践を実践家に任せるという社会的分業を彼は主張してはいない。彼は『社会学および経済学における「価値自由」の意味』において、このような分業的立場を「似非価値自由な態度」(pseudowertfrei) として棄却している。

次に、ヴェーバーの理論的根拠として重要なのは「存在」(Sein) と「当為」(Sollen) の区別である。

「存在」に対応するものは、現象の原因を科学的な方法によって見つけ出すという行為になる。つまり思想・信条などの「価値から」切りはされた形で現象の因果帰属を行う。「ひきこもり」というテーマで言うならば、「ひきこもり」という現象が起こった原因を科学的な方法をもって分析するという行為にあたる。

「当為」に対応するものは、研究の意義・価値を認知して研究を行うことである。これは、実践家としての行動にもつながる。社会学者は社会の中で研究を盾に批判が至らない特別な位置にいるわけではなく、あくまでも社会の中の行為者の一人である。これは、どのような行為を行うにしても、その行為が社会的行為として機能し、そして認知されるということを示している。つまり「研究を通して何がしたいのか？」ということが個人の立場として価値として持たれていなければならない。本稿で言えば、「ひきこもり」という現象を予防し、現象を縮小させるという価値判断である。これは客観的観察からもたらされるものではなく、あくまでも個人的な価値であり、また、逆に言えば、観察からはもたらされるはずのないものである。観察と価値判断が同一のものであるとしたものは、国民経済学のヒルデブラントやシュモラーに見られるものである。しかし、ヴェーバーにおいては、「存在」と「当為」は区別される。客観的観察の中から何らかの価値判断を客観的な形で取り出して来ることはできない。

ヴェーバーのこの立場を浮き上がらせるためにはアメリカの社会学者でコミュニタリアン運動を行っているアミタイ・エチオーニの主張を示すことが有効である。エチオーニは『新しい黄金律』の中で「機能主義的パラダイム」という言葉で持って社会学者の役割規

定を行っている。

本書で用いる機能主義的パラダイムは、すべての社会にはある一定の普遍的なニーズが存在し、常にそれに対していくつか異なる応答方法がある、と想定する。犯罪と闘うにしても、あるコミュニティはコミュニティから疎遠になった人たちに対し、門を閉ざす代わりに受け入れ、コミュニティのメンバーに加えることもある。確かにこれら各種の方法は決して同じものではないし、その効果の程度も異なっている。社会のニーズを満たすためには、ある特定の決まった方法で社会をつくり上げねばならない、というわけでもない。社会の基本的ニーズを何らかの方法で満たさねばならないこと、よりよい社会をつくり上げる方法が存在する、ということを指示するだけである。(Etzioni 一九九六＝二〇〇一：二二―三)

社会には「ニーズ」が存在し、それに「応答」する形で社会学者が機能主義的な方策を提示するというモデルである。道具主義的とも言える社会学の役割規定と言える。ヴェーバーとエチオーニの差異は研究テーマ、研究の意義をどこから供給するかということにある。エチオーニはコミュニティから供給されるものだと仮定しているが、ヴェーバーは研究者の興味関心によって供給されると捉えている。「ひきこもり」に関してコミュニティから「ひきこもり問題は解決される方が望ましい」という「ニーズ」の供給はあると思われるが、原理的にはコミュニティからの供給がなければ応答ができないというのは問題があるため、本稿でヴェーバー的な立場を取る。

このような社会学と政策の関係性を俯瞰した上で、「ひきこもり」という現象に関して述べられたことをみてみようと思う。ひきこもりの「語り」を集めた研究をしている石川良子は次のように述べている。

> 当事者が語る原因や契機は誰もが経験しうるような出来事ばかりであり（たとえば進路選択上の挫折、親との葛藤、友人との行き違い、いじめなど）、そこから「ひきこもり」に固有の何かが導き出せるとは考えられないからだ。
>
> （中略）
>
> 仮に、ひきこもり始める原因を誰しも経験しうるような「一種の挫折体験」に置くとするならば、ひきこもることを〝予防〟するのは絶対的に不可能だ。（石川二〇〇七：八三―四）

石川の主張は原因の特定はできず、原因の特定ができないために予防無理であると主張する。しかしこの記述の問題点は「ひきこもり」に関しての事実関係ではなく、そもそも社会学が足場とする科学的方法論を無視した主張であるということである。

科学的な方法論は、事象の間に差異があるために違った結果が起こるという考え方とともに、母集団に共通した性質が一部の集団に代理表象されるという考え方を持っている。最も社会学者に了解しやすい例はデュルケーム『自殺論』だと思われる。デュルケームは

社会がアノミー的状態になることによって、その構成員の中からアノミー的自殺が起こるとしている。社会がアノミー的状態になったからといって、全員が自殺をするわけではない。同じ状態になっているからといって、すべての人々が同じ結果に陥るわけではない。社会がアノミー状態になることによって、一部の構成員が社会の性質を代理的に表象するものが現象というものである。従って、自殺者は社会のアノミーという性質を代理表象しているのである。同じように「ひきこもり」というものも母集団の性質を代表しているのである。

「ひきこもり」に関して具体的に見るために、精神科医の井上洋一による大学の学生相談室での事例から次のように分析を行っている。

いずれの問題も学生個人にとっては切実な悩みとなり得る問題であるが、大学生であれば誰もが大学生活において体験する可能性のある問題であり、稀な体験や特別な出来事は認められなかった。「ひきこもり」が特別の要因から生じる現象ではなく、ひきこもり学生がもつ悩みは一般の学生にも見られる問題と共通のものであることを示す結果であった。（井上ほか 二〇〇六）

井上が述べるようにひきこもり群の学生の悩みは一般の学生のものと共通性がある。井出（二〇〇七）では大学での「ひきこもり」を二つの観点から分析した。一つは課題の問題であり、一つはコミュニケーションの問題である。

大学でひきこもり状態に至った経験者たちに調査すると、中高では全く問題がなく、むしろ優等生で来た者ばかりである。彼らは中高での「ひきこもり」のように拘束的な環境に適応できなかったのではなく、そのような環境に問題なく適応していた。しかし、開放的な大学の環境に適応できなかった。

開放的な環境とは具体的に二つの環境の変化である。第一にコミュニケーションの問題として。中学・高校の生活というのは、朝から晩まで同じ教室で同じメンバーと共に暮らす。そして、それが一年二年と持続する。従って、学校に行けば誰かとコミュニケーションが取れるということが制度的に確保されているのである。しかし、大学に入学すると事情が一変する。文系の私立大学が典型的であるが、一つの学部が数千人を超えるようなところでは、中学・高校のようなクラスは存在しないため、自分からコミュニケーション機会を求めていかなければならない。サークルやクラブに参加し、バイトをして友達を積極的に作っていかなければ、孤立をする。中学や高校と同じようにしていると、気づけば「ひとりぼっち」ということが大学では起こりうるのである。

井上洋一は大阪大学の学生生活を調査した結果から、次のように指摘している。

項目別に見ると最も多い訴えが「友人が乏しい」七名（五四

%）であった。本人の口から明確に語られた事例のみがカウントされているので、実際にはさらに多い可能性がある。大学のキャンパスでは多くの学生が友人グループを作って共に行動している。授業のレポートやテスト勉強では互いに助け合い、食事の時間や授業の合間を共に過ごし、同じクラブやサークルに所属して活動するなど、友人の果たしている役割は大きい。大学生活の中で生じる様々な問題について相談相手になり、不安を分かち合い、楽しさを共有しあう友人の存在は大学生活の充実度に大きく影響している。友人が乏しいと訴えるひきこもり群の学生の中には、キャンパス内で話し相手が一人もいなくて孤立している事例もある。（井上ほか 二〇〇六）

井上が指摘するように、大学でひきこもり状態になった人というのは、流動的で開放的な大学でコミュニケーション機会を獲得することを失敗し、孤立した人たちなのだ。

第二に、課題の面でも大きな変化が大学では起こる。中高では小テスト・定期テストなどの課題が定期的に降りてきて、大学受験という目標も与えられていたわけだが、大学では大きく環境が変わる。大学では、高校までのように朝から晩まで授業があるということもなく、学期末にあるテストも比較的楽に突破できるようになっている。また、中学高校では「受験」という目標があったが、大学では目標が供給されない。「人生の目的を自身で見つけよ」と言われるような生活に変化するのである。中学高校での目標や課題が降りてくる生活から、自身で目標や課題を見つける生活へという変化が大学で起こるのである。もし、中学高校のようにコミュニケーション・課題・目標が供給されることをずっと待っているならば、毎日何もすることもないという日常が待っているのである。

このような変化は「大学」という制度が構造的に用意するものである。中学高校に比べ非常に「自由」で開放的な生活を送ることが出来るが、油断をすると孤立をし、日々を無為に過ごしてしまう。その典型的で象徴的な表れとして「ひきこもり」が生み出されているのである。

このように高校と大学の間には埋めようのない段差が存在し、その段差につまずくというのは珍しいことではない。このような「躓き」の中で、躓きから立ち上がることに失敗する人もいる。表現としては「確率論的」と表現すると比較的了解しやすいが、他の条件や偶然によって、ひきこもる人もいれば、ひきこもらない人もいる。このような場合の原因の特定は比較的容易である。そして、その処方箋も容易に導出できる。大学での「ひきこもり」で言えば、原因は高校と大学の段差であるのだから、処方箋はその段差を低くすることになる。

そうすれば、高校と大学の間の段差で躓く人たちの数は減り、躓き方も軽いものになろう。そのことによって、大きく躓いて「ひきこもり」になってしまう人たちも減ることになる。高校と大学の段差を原因と多くの人が躓き、その中で大きい躓き方をした人が「ひきこもり」になるのである。このことは、高校と大学の段差が存在

するという「制度」によって生み出されているのである。社会学の社会政策へのコミットの方法の代表的なものは制度の変更を行うことであり、「ひきこもり」の予防はこの政策へのコミットによって実現可能である。このようなコミットは社会学として「ひきこもり」という現象を扱う使命でもあると考えている。

「ひきこもり」は個人の自由という見方もあるが、精神医学的見地からみると、治療の対象となるような苦痛が存在し、**社会学見地からみると、社会の中では通常起こりえない「社会的行為の喪失」という状態が存在していることがわかる。**本稿で定義した「ひきこもり」の定義から現象の特殊性を描き出し、政策的に介入する必要性を示すことができる。

7. 結論

精神医学の関心は治療を行うことにある。このことから「ひきこもり」をまず診断する必要があり、この必要性から斎藤の定義は生まれている。斎藤による精神医学の定義は精神医学の目的に準じたものであるように、社会学の定義も社会学の目的に準じたものである必要がある。このような観点から本稿では、七〇年代半ばから起こった「ひきこもり」という現象を「社会的行為の喪失点」であると定義づけた。

社会学にとって「ひきこもり」という現象が興味深いのは、社会学は人が存在すればそこには何らかの社会的行為があるだろうと考えてきたが、その常識的見解を裏切る現象が日本において数十万人規模で起こっていることである。しかも、その原因は社会的なものであり、制度的に現代日本で生きる者のライフコースの中に潜んでいるのである。

社会学の目的は第一義的には「ひきこもり」という現象の原因を特定することである。その作業を通じて二つの研究意義を達成することができる。

第一に「ひきこもり」を現代社会の代理表象として扱い、「ひきこもり」を通じて現代社会の検討を行うことである。

第二に原因特定の結果に従って「ひきこもり」という現象の収縮・予防のために処方箋を出し、積極的に社会政策の策定へコミットする必要性があることを示した。

本稿で行われたことは、精神医学的定義を検討した後に、社会学的な「ひきこもり」の定義を確認したことと、その定義に則って、社会学的関心を特定し、二つの研究意義を示したことである。

注

(1) 岡山大学の（三宅 二〇〇二）によると、ひきこもりを経験した世帯数は四一万世帯と推定できるという。調査地区での発生率を平成一四年度の全国の総世帯数にかけると、四一万世帯（九五％信頼区間二〇万〜六三万）となる。この数値の留意点は（1）「世帯」数である。回答は全一六四六世帯中一四世帯（〇・八五％）（2）地域差への考慮。岡山県・鹿児島県・長崎県への調査である。「ひきこもり」が多いとれる都市部への調査ではない。この点で数値が低く出ている可能性あると報告書は考えている（3）「我が子がひきこもりだ」という

質問は非常に答えにくいものであるため数値が低く出ている可能性がある。下限値であると報告書は考えている。(4) 二〇万〜六三万の幅を持った区間推定値である。実際は四一万世帯よりも少ないかもしれないし、多いかもしれない。また、二〇〇二年度調査に引き続き、同様の調査設計で行われた二〇〇三年度調査（三宅 二〇〇四）でも点推定値三二万世帯、区間推定一八万〜四六万（九五％信頼区間）という数値がでている。二〇〇二年度調査との差違は、栃木県が新たに調査対象となったこと、調査対象人数が一六四六人[〇二年]→二九七四人[〇三年]と拡大したことである。この二つの調査によって、日本に「ひきこもり」が数十万単位で存在していることは確認されている。

(2) http://www.sofu.or.jp/hikikomori.html 二〇〇七年一月一五日閲覧

(3) http://www.sofu.or.jp/hikikomori.html 二〇〇七年一月一五日閲覧

(4) デュルケムは『自殺論』第三編第一章の注釈で以下のような見解を示している。「けっきょく、筆者の考え方は、物理的、化学的、生物学的、心理的な力に、社会的な力をつけくわえるという結果となるにすぎない。この社会的な力は、右のそれぞれとまったく同様に、外側から個人にはたらきかける。」(Durkheim 一八九三＝一九八九：五三四)。様々なタイプに広がった現在の制度的学問としての社会学をこの説明でカバーすることは出来ないが、本書で言及する「社会学」というものはこの説明内にあるものである。

(5) いくつかの証言に基づき、一九七〇年代後半くらいから、徐々に増加して今日に至ったと推定することができます。(斎藤 二〇〇二：三四)

(6) 「ひきこもり」事例は、日本に突出して多くみられると言われています。(中略)「ひきこもり」が日本に特異的な現象であることを示すような傍証はいくつもあります。(斎藤二〇〇二：五一)

(7) 「現象」としての「ひきこもり」とは、本稿では社会的事実として観される「ひきこもり」を想定している。

(8) ホマンズの定義は「社会行動」(social behavior) に対して行われたものであるが、指している内容が「社会的行為」(social action) と同じため、社会的行為の定義として捉えられることが多い。ヴェーバーは行動を外面的な振る舞いから内面的な状態まで大きく含んだものを「行動」(Verhalten)とし、そのなかで主観的な意味があるものを「行為」(Handeln)としている。従って、Verhalten の英訳語として behavior がとられるとしても、ホマンズの social behavior はヴェーバーの Soziales Handeln に対応する。

(9) http://blog.mf-davinci.com/mori_log/archives/2007/08/post_1333.php

(10) ここでの理念という言葉は、思想的な「理想」という意味ではなく、実在のものを「思考の上で高めて得られる、ひとつのユートピアの性格」(Weber 一九〇四＝一九九八：一一二) という意味である。また、実在が持つ特定の性質・要素を取り出して、その性質・要素について理念化をするわけではないので、この定義は「理念型」には相当しない。

(11) 先行研究ではヴェーバーやホマンズなどによって定義づけられてきた「社会的行為」であるが、「直接接する他者」を加えるかどうかという点は、現象を取り扱う定義にとってはあまり大きな差異ではない。方法論的個人主義においては、様々な各個人の持つ性質から共通する性質を抽出していくものと通常は考えられるためである。また、ヴェーバーは「実態」と「理念型」は近似値的なものに過ぎないと述べているところにもこの論拠は求められる。「こういう理想型的構成の例を挙げれば、経済学の純粋理論が作っている諸概念や諸法則がこれに当るであろう。それは、仮に人間の或る行為が錯誤や感情に妨げられることなく完全に目的合理的に行なわれるとし、その上、或る目的（経済）だけを一途に目指しているとした場合に、その行為が辿るであろう過程を明らかにするものである。現実の行為は、稀な場合（株式取引所）を除いて、理想型的に構成されたような経過を辿ることはない

し、辿ったとしても、単に近似的に過ぎない。」(Weber 一九二二＝一九七二：一六)。ここでの偏差として理性概念として捉えられる現象と実態としての現象の差異のことである。本稿では純粋な形のひきこもり当事者は「社会的行為を喪失している」と捉えている。従って「現象」としての「ひきこもり」も「社会的行為の喪失点」として定義づけている。また、この際には、ヴェーバーとホマンズの「社会的行為」の定義の差は、「現象」の定義としては意味を失う。なぜならば、「現象」に対する定義は現象が純粋な状態として示される状態を指示することになるからである。また、ここで示す定義法は、平均類型を提示するという方法とも区別される。平均類型とは「ひきこもり」と見なされる人々を足し合わせて、割った平均としてのひきこもり像であるが、各構成員の平均と現象は異なる概念である。「ひきこもり」の場合、KHJ親の会（二〇〇五）の調査によると外出は平均月あたり一一・一日であるが、平均類型では「ひきこもり」の性質を外出は一一・一日とすることになる。この平均を定義に含めることは方法上ほとんど意味をなさない。そのような平均を提示するのではなく、「ひきこもり」と呼ばれる状態の純粋な形を定義として採用し、その純粋な形からの偏差によって実態をつかむという方法が理論的に有効である。また、「理念型」という用語に関しては、「特定の要素を取り出す」という性質から記号論で言うところのシニフィエをシニフィアンであるかのようにして扱うことだと本稿では解釈している。ヴェーバーの倫理論文を例にすると、プロテスタントの持つ「性質」のうち「世俗内禁欲」という一つのシニフィエ（性質）を選び出し、シニフィアンとして扱うことである。なお、リッケルトとヴェーバーの「理念型」の扱い方の差異はその「性質」の選び方にあると整理できる。

(12) 方法論的全体主義に分類されるデュルケームにおいてもこの見解は齟齬を来さない。デュルケームは個人単位では見いだせない「社会的なもの」（デュルケームはこれを社会的事実と呼んだ）が各個人の行為を決定しており、それを科学的に見つけ出すことが社会学の行うべき事であると考えていた。デュルケームは規準論文で以下のように述べている。「その個人的な諸表現についていえば、なるほど、それらも部分的にはある集合的なモデルを再現しているのだから、いかにも社会的なものかを含んでいる。とはいえ、その各々はまた、しかも相当な部分において、個人の有機的・心理的構造ならびにその個人のおかれている特殊な諸条件によっても規定されている。これらの点からすると、それらは固有の意味での社会学的な現象ではない」(Durkheim 一八九五＝一九七八：六一―二)。これは、デュルケームが現象の中で社会学的と呼称できる部分について述べたところと理解できる。デュルケームは社会学によって現象のすべてを説明しようと考えていたわけではなく、多元的に説明変数を考えていた。従って、一つの現象の中で社会学によって説明できる部分もあれば、できない部分もあると考えていた。「ひきこもり」の場合には、現象が精神医学によって取り出されているため、社会学が説明する部分が非常に見えにくいという特質を持っている。従って、社会学の定義によってひきこもり現象のどの部分を説明するのかということを「定義」において示す必要が出てくるのである。

(13) ここでは本文の大筋とは離れるが注釈として臨床面での区別について述べる。「ひきこもり」は広場恐怖との区別が必要である。例えば、会いたくない人が自治会にいるから自治会に出かけないという場合、出会わないことを「意図」としているので社会学ではその行為を「社会的行為」とみなす。しかし、この種の「社会的行為」のケースを「ひきこもり」に当てはめてみた場合、この種の「ひきこもり方」をするのは「ひきこもり」ではなく「広場恐怖（パニック障害）」という診断まず考える必要がある。精神科医の貝谷久宣は次のように述べている。

社会的ひきこもりと広場恐怖によるひきこもりの最も大きな違いは、広場恐怖のひきこもりでは社会的な接触は保たれることである。この事例ではうつ状態がある間は友人との交流はほとんど認められなかったが、抑うつ状態が軽快するとともに、また、治療が進むとともに社会的接触が活発になった（貝谷二〇〇三：二五七－八）

このような差異によって、パニック障害に見られる広場恐怖と社会的ひきこもりは区別される。また以下のような差異もある。

グループでの行動を嫌うのは人前でのパニック発作を恐れ、社交を回避する状態であり、二次性社会不安障害が生じてきていると考えられる（貝谷二〇〇三：二五七）

広場恐怖では、このように「人前に出てパニック障害がでたらどうしよう」という恐怖によってひきこもり状態になることがある。ここでは、パニックの恐怖が起きた場合のことを想定し、人前でパニック障害を出したくないという「意図」がなされて、ひきこもるという行為が選ばれているので「社会的行為」と見なすことができる。

(14) この命名は「不登校」(Non-Attendance at School)という命名が英語圏で行われたものとして不登校例示されるHersov の Non-Attendance at Schoolという論文と命名になぞらえたものだと思われる

(15) ひきこもり状態においては社会的行為が激減する。そして、そのために他者との交流する場面も喪失し、社会学が分析対象として得意としている諸社会的行為が縮減される。そして、社会学はそのような状態に対して現象を記述する言語を持ち得ないのである。

(16) 個人的な理由としては、エコール・ノルマル・シュペリウール（高等師範学校）の卒業以降に地方で教師をしたデュルケームが、耐え難い孤立を味わったことや、同じような境遇にいた親友が自殺したことと何らかの関わり合いがあると推測されている。

引用文献

American Psychiatric Association, 1994, *Diagnostic and statistical manual of mental disorders: DSM-IV.*

American Psychiatric Association, 1994, *Diagnostic and statistical manual of mental disorders: DSM-IV, Arlington, VA: American Psychiatric publishing.* (＝一九九六，高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳，『*DSM-IV* 精神疾患の診断・統計マニュアル』医学書院．)

Durkheim, Emile, 1897, "Lesuicide:etude de sociologie"（＝一九八五，宮島喬訳，『自殺論』中央公論社．）

――――*1895, Les regles de la methode sociologique.*（＝一九七八，宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波書店．）

Etzioini, Amitai, 1996, *The New Golden Rule: Community and Morality in a Democratic Society.*（＝二〇〇一，永安幸正訳『新しい黄金律――「善き社会」を実現するためのコミュニタリアン宣言』，麗澤大学出版会．）

保坂亨，二〇〇〇，『学校を欠席する子どもたち―長期欠席・不登校から学校教　育を考える』東京大学出版会.

井上洋一，二〇〇六，『厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）総括研究報告書 思春期・青年期の「ひきこもり」に関する精神医学的研究』.

井上洋一・小笠原将之・福永知子・小川朝雄・補永栄子，二〇〇六，「青年期後期の発達課題と引きこもりの関連についての研究（その 1）」『厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）総括研究報告書 思春期・青年期の「ひきこもり」に関する精神医学的研究』

井出草平，二〇〇七，『ひきこもりの社会学』世界思想社.

貝谷久宣，二〇〇三，「パニック障害」『精神医学』45 巻3号，255-8.

衣笠隆幸，二〇〇一，「「ひきこもり」の症状形成と時代精神――戦後５０年の神経症症状の変遷の中で」『こころの臨床 a la carte』20(2)，211-5.
国立精神・神経センター精神保健研究所社会復帰部，二〇〇三，『１０代・２０代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン――精神保健福祉センター・保健所・市町村でどのように対応するか・援助するか』.
倉本英彦，二〇〇三，「ひきこもりの予後」『精神医学』45巻3号，241-5.
Hersov, L. A., 1960, PERSISTENT NON-ATTENDANCE AT SCHOOL, Journal of Child Psychology and Psychiatry, Volume 1 Issue 2 Page 130-6
Homans, George Caspar, 1961, Social behavior : its elementary forms, New York : Harcourt, Brece & World.(=一九七八，橋本茂訳『社会行動：の基本形態』誠信書房.）
三宅由子・竹島正・立森久照，二〇〇二，「地域疫学調査による「ひきこもり」の実態調査」『平成十四年度厚生労働科学研究費補助金（特別研究事業）地域疫学調査による「ひきこもり」の実態調査 分担研究：地域のメンタルヘルス指標の検討 研究協力報告書』,89-93.
三宅由子・竹島正・立森久照，二〇〇四，「地域疫学調査による「ひきこもり」の実態調査」平成十四年度～平成十六年度のまとめ，『平成十六年度厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）こころの健康についての疫学調査に関する研究 研究協力報告書』，89-93.
文部科学省，一九六七―二〇〇七，『学校基本調査』.
斎藤環、一九九八，『社会的ひきこもり――終わらない思春期』PHP研究所.
――――二〇〇二，『ひきこもり救出マニュアル』PHP研究所.
――――二〇〇三，『ひきこもり文化論』紀伊國屋書店.
清水將之，二〇〇三「ひきこもりを考える」『精神医学』45巻3号，230-4.
塩倉裕，二〇〇三，『引きこもり』朝日文庫.
Weber, Max, 1904, DIE "OBJEKTIVTAT" SOZIAL WISSENSCHAFTLICHER UND SOZIAL POLITISCHER ERKENNTNIS.(=一九九八，富永祐治・立野保男訳・折原浩補訳，『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店.）
――――1917, DER SINN DER "WERTFREIHEIT" DER SOZIOLOGISCHEN UND OEKONONISCHEN WISSENSCHAFTEN.（=一九七二，木本幸造訳『社会学・経済学における「価値自由」の意味』日本評論社.）
――――1922, SOZIOLOGISCHE GRUNDBEGRIFFE(=一九七二，清水幾太郎訳，『社会学の根本概念』岩波書店.）
吉本隆明，二〇〇二，『ひきこもれ――ひとりの時間をもつということ』大和書房.
全国引きこもりＫＨＪ親の会，二〇〇五，『「ひきこもり」の実態に関する調査報告書』.

"Hikikomori" as Sociological Problem

Sohei IDE

This paper aims at showing the "Hikikomori" phenomenon definition in term of sociology and its significance for sociological treatment of "Hikikomori."

The important point for sociology that sociology thinks people always do "social action," but under the situation of "Hikikomori", there is no or a few social action. This is very anomalous for not only sociology but also common knowledge. There are hundreds of thousands of "Hikikomori" as social phenomenon in Japan. Thus anomalous situation is very regular in Japan. Therefore the cause of "Hikikomori" is "social thing" and lie hidden Japanese regular course in Japan.

Sociology needs to discover the cause of "Hikikomori" and has the ability to do. Sociology can attain two significances of research.

Firstly sociology treats "Hikikomori" as the "representation" of society, and analyzes modern Japanese society through "Hikikomori."

Secondly Sociology must show the solution of "Hikikomori" from the outcome of sociological research for reduction and preservation of "Hikikomori." I think sociology should participate in real policymaking proactively.